研究主題「知的障害特別支援学校における児童の発信する意欲を高める指導の工夫 —図画工作科におけるデジタル教材を活用した表現と鑑賞の一体的な充実—」

東京都教職員研修センター　研 修 部　授業力向上課
都立臨海青海特別支援学校　主任教諭　大西　佐知子

第１　研究のねらい

特別支援学校図画工作科では、児童が表したいことに合わせて材料や用具を選択し、工夫して表現する造形活動を行っている。しかしながら、児童の実態として、手元や作品に注目することが難しい児童や、意思の表出が少なく他者との関わりが少ない児童等、様々な児童がいるため、児童同士が意見を述べ合ったり、作品を認め合ったりする鑑賞活動を更に充実する必要がある。

学習指導要領では、表現と鑑賞について「それぞれに独立して働くものではなく、互いに働きかけたり働きかけられたりしながら、一体的に補い合って高まっていく」ものであり、表現及び鑑賞の活動の中で、共通に必要となる資質・能力を育成することが、形や色などを活用したコミュニケーションの基盤になると示されている。したがって、児童が見方や感じ方を広げたり、作品を通して意思を伝えようとしたりするためには、制作した作品に、より多くの人から意見や評価を得る機会を意図的に設定することが重要である。

そのために本研究では、デジタル教材を活用し、児童がより多くの意見や評価を得ることができる発表や鑑賞をする活動の充実に取り組むこととした。このような経験により、児童は自分の視野や関心を広げ、自分に合った手段で制作することができ、作品を通して、他者に発信する意欲が高まることにつながると考える。

第２　研究仮説

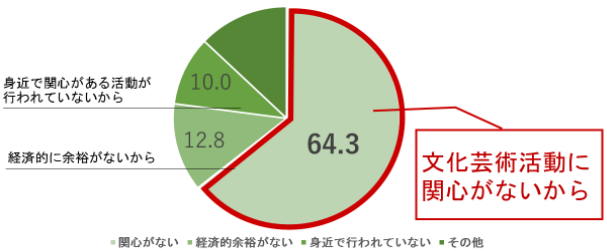
デジタル教材を活用し、児童が制作した作品により多くの意見や評価をもらうことができる発表や、鑑賞する活動を充実させることで、発信する意欲が高まるであろう

第３　研究の内容と方法

１　基礎研究

図画工作科における「表現と鑑賞を一体化させながら、資質・能力を育成する学習指導と評価」について先行研究を調査した結果、対話型鑑賞によって多様な見方や感じ方を体感することができることや、表現と鑑賞の連続的な構成によってより豊かな表現へとつながることが分かった。教材については、枠や画面等で範囲を限定することによって注意や集中をより持続できるため、端末での鑑賞が有効であるとする研究が多いことが分かった。

文化庁の「障害者の文化芸術の鑑賞活動及び創作活動実態調査」では（図１）、過去１年間に文化芸術に関わる活動をしなかった人にその理由を質問すると、最も多いのが「文化芸術活動に関心がないから」という結果であった。障



文化庁「障害者の文化芸術の鑑賞活動及び創作活動実態調査」
平成 29 年 11 月 30 日

害者による文化芸術活動の推進に関する法律では、「文化芸術活動を通じた交流等を促進することにより，住民が心豊かに暮らすことのできる住みよい地域社会の実現に寄与すること」と示されている。

このことから、知的障害特別支援学校の児童が将来、地域社会で豊かに暮らすことにつなげるために、芸術活動を通じて周囲に発信する力が必要であると考える。児童が制作した作品に、より多くの意見や評価を得ることができる発表や、鑑賞する活動を充実させた授業を設定する必要がある。

２　調査研究

児童の実態に応じた発信する力を育てるための課題と手だてを整理する目的で、学年担当教員を対象に質問紙調査を実施した。調査結果をレーダーチャートに表し（図２）、障害特性上の表現活動とコミュニケーションにおける実態を視覚的かつ客観的に捉えやすくした。

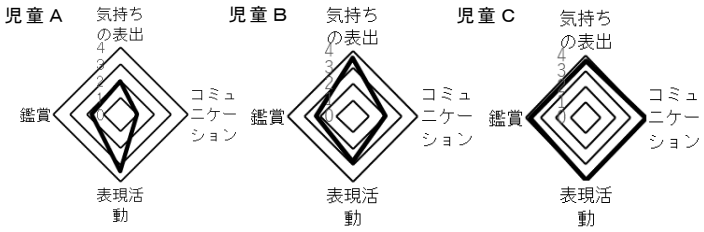


図２　実態調査レーダーチャート（抜粋）

また、所属校では児童・生徒の実態把握のため、言語発達の側面からアセスメントを行っている。本研究に必要な表現と鑑賞に関する項目を、発達検査「太田ステージ評価」（太田のステージ評価各ステージの状態像）より抜粋した。

本調査結果とアセスメント結果を用いて、発表、鑑賞及び評価時の手だてを実態ごとに段階として整理した（表１及び図３）。

表１　実態ごとの教材使用方法と手だて

段階	１段階	２段階	３段階
発表	・実物を提示 ・選択肢の精選	・端末で提示 ・効果音を使用	・端末操作 ・表し方の選択肢を増やす。
鑑賞	・モニターで拡大	・実物と端末で提示	・端末操作
評価	・肯定的な効果音や感触の教材を使用	・具体物を手渡す。	・評価（星）を数で示す。

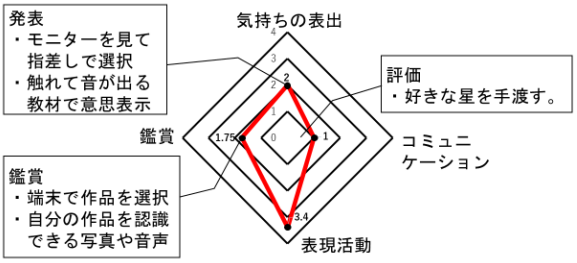


図３　Ａ児に対する手だて

３　開発研究

実態調査から有効と考えられる方法を具現化するために、アプリを活用したデジタル教材の開発を行った。

デジタル教材「じぶん美術館」では（図４）、作品を飾ったり発表したりできる鑑賞の工夫として、児童がこれまで制作してきた作品を集め、個人端末にデータを取り込んで作成できるようにした。児童が好きな作品を選んだり、飾り方を工夫したりしながら対象を意識して制作するように指導することで、発信する意欲につながると考える。

図４　デジタル教材「じぶん美術館」
（タブレット端末を使った作品の鑑賞）

4　検証授業

（１）　検証の結果

ア　授業時の児童の様子

都立特別支援学校小学部第３学年図画工作科で児童 10 人のグループを対象に、単元「じぶん美術館に飾ろう」を実施した。全６回の授業では、実態調査の結果から整理した段階ごとの手だてを基に、児童の実態に合わせて教材を使用した。１段階の児童は発表時、作品を取り込んだ端末の画面に触れて選択し、モニターで共有しながら鑑賞した。２段階の児童は、飾りたいものを指差しで選んで発表し、端末で拡大して鑑賞した。３段階の児童は、端末を操作しながら見せ方や飾り方を考えたり、鑑賞した作品の感想を言葉で伝えたりした。評価の場面では、カード等の具体物を使ってやり取りすることで、１段階の児童は渡したり受け取ったりする感触を味わった。そして、２段階の児童は評価の星がたくさんあることを喜び、３段階の児童はもらった星の数量を見て、評価を肯定的に捉えていた。

その中でも、２段階の手だてを行ったＡ児は、発表、鑑賞、評価の場面で、それぞれの課題に対して変容が見られた（図５）。特に発表の場面では、できたことを見てほしいと自分から教員に伝える姿が見られた。Ａ児はこれまで自分から他者に積極的に関わることはなかったが、自分の作品をよく見て選び、飾り終えたときに自発的に教員に伝える様子が見られた。これは、本研究主題である発信する意欲につながる姿だと考える。

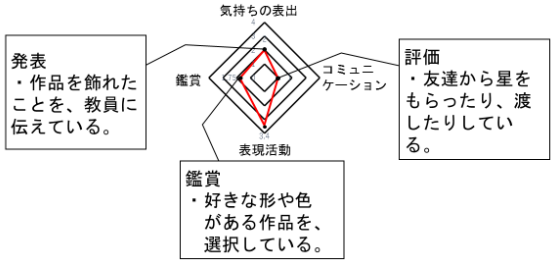


図５　検証授業時のＡ児の様子

授業後の教員アンケートから、各場面で他者に伝えようとする児童の姿が多く見られた。その中でも、作品を選択する場面において「すごく悩んだり、これがいいとすぐに選んだりしていた。」という児童の様子があった。この「すごく悩んだり」という様子は、児童が自分の作品を吟味して思考していることを見取ることができる。

イ　授業後の児童の様子

１か月後に実施した教員へのインタビュー調査では、これまで見られなかった児童の様子を聞くことができた。今不安に思っていることや、心配な気持ちを絵で表現する等、描く内容が変化した児童がいた。また、鑑賞後の感想を発表する場面で「僕はこう見えた。」と自分の見方や感じ方を言葉で説明する児童や、感想を他者に伝えることを楽しみに待つ児童が見られた。その他にも、これまで周囲に関心を示さなかった児童が、日常の生活の中で、友達の読んでいる本や遊びに関心をもち、近付いて見ている様子が見られた。これらの様子から、進んで他者と関わり、児童の発信につながる効果を得ることができたと考える。

（２）　まとめ

検証授業の結果、Ａ児に変容をもたらしたものは、「見る・見分ける」「選ぶ」という活動であったと考える。児童は、「じぶん美術館」に飾るために複数の自分の作品を見渡し、好きな形や色を見分け、選択して配置した。この活動において児童の思考が促され、達成感を得て、近くにいた教員に対して自ら喜びを伝えようと視線を合わせる行

図６　授業展開モデル

動があった。図画工作の授業では「作る」活動、「見せる」表現を行い、鑑賞する。そして「評価を得る」この授業展開が主であった。今回の検証授業で「じぶん美術館」を活用し、「見る・見分ける」「選ぶ」の活動を引き出せたことで（図６）、児童の発信する意欲の向上につながったと考える。

第４　研究の成果

本研究では、図画工作科の授業において「見る・見分ける」、「選ぶ」という活動が引き出しやすい「じぶん美術館」の活用と授業展開の構成を考えることができた。その結果、表現と鑑賞を一体的に充実させた授業を行い、児童の発信する意欲の向上につなげることができた。

（１）デジタル教材「じぶん美術館」を活用した表現と鑑賞

児童が「じぶん美術館」を制作し活用することで、作品を見る・見分ける・選ぶという行動を引き出しやすくなった（図７）。児童は「じぶん美術館」を操作し、自分がこれまで制作した作品を振り返ったり、飾りたい作品を考えたりして、思考して表現できた。さらに、完成した「じぶん美術館」を鑑賞する場面では、作品に対して他者からの肯定的な評価を得て、喜ぶ姿が見られた。このようなことから、特別支援学校学習指導要領図画工作科２段階の目標につなげることができたと考える。

図７　「じぶん美術館」の利点

（２）　表現と鑑賞を一体的に充実させた授業展開モデル

授業において、「じぶん美術館」を効果的に活用するために、展開モデルを作成した（図８）。このような展開モデルを使用することで、題材（単元）ごとに表現と鑑賞を一体的に取り入れた授業展開を構成しやすくなる。

図８　授業展開モデルと学習指導案の構成

（３）　副籍交流での教材使用

副籍交流において、児童が持参した端末を用いて「じぶん美術館」の発表を行った。発表後、交流校の児童から、色付けしたたくさんの星（評価）を受け取った。具体の星のやり取りが話しかけられるきっかけとなり、児童同士の交流をより引き出すことができた。このように、「じぶん美術館」を活用することで、副籍交流の内容の充実が期待できる。今後の交流活動において、特別支援学校と交流校でオンラインにて「じぶん美術館」の発表を行うなど、実情に応じた効果的なＩＣＴの活用を展開できると考える。

第５　今後の課題

本研究では、デジタル教材を活用し、表現と鑑賞を一体的に充実させた授業を行い、児童の発信する意欲の向上につなげることができた。図画工作・美術の授業では、開発した授業モデルを基に、様々な造形活動において表現と鑑賞を一体的に充実させる授業展開が考えられる。今後は、題材ごとの具体的な活用例を検討していく。